

「本」を直し「人」とつながる



和気あいあいとひのきしんに励む。教友と信仰の話をするこの時間が、大村さんの楽しみでもある
(呉市内で)

背 表紙が破れてボロボロになった昆虫図鑑、ページに皺が寄った乗り物の絵本…
…。広島県呉市にある大村靖信（79歳・西国分教会西龍河布教所長）の自宅に

は、修理が必要な絵本80冊ほどが山積みにならされていた。
「人気のある本ほど、すぐにボロボロになる。一度修理した本が、再びここへ戻って
くると、『子供たちがまた読んでくれたんだ』と、かえってうれしくなる」と大村は
微笑む。

未信仰家庭に生まれ育った大村がお道と出合ったのは、妻・昭子（80歳）との結婚
がきっかけ。会社を定年退職した20年前、修養科を志願した。

修了後、妻に誘われ、支部活動に参加するように。呉支部では、平成元年から月1
回、布教所長の武田文夫（故人）が中心となって、図書修理のひのきしんを続けていた。

当初は、なんとなく足を運んでいた大村だが、続けて参加するうちに、やりがい
を感じるようになった。「武田先生は、修理の方法を親切に教えてくださるし、お道の
仲間と一緒にいる時間が楽しくて。それに案外、自分が几帳面な性格だと分かって、
性に合っていた」

10年ほど前、武田からグループの代表を任された。〃恩師、亡きいま月1回、教
友と共にひのきしんにいそしむ。これまでに修理した本は6万8千冊に上る。

修理する本は、自身が支部管内の小学校や保育園、児童館など計100カ所ほどを車で
巡回して回収してきたもの。時には、40*離れた離島や隣接の江田島市へ出向くこ
ともある。

「幼稚園や学校の先生方は忙しく、本が傷んでも修理する時間がない。ボロボロにな
った本は子供たちも手に取らなくなってしまう。私が行くと、先生方が『待ってまし
た』と迎えてくださることもある」

職員たちからは「大村のおじさん」と呼ばれ、すっかり顔見知りの仲だ。

月1回のひのきしんの日以外にも、毎日空いた時間を見つけては自宅で黙々と修理
に取り組む。〃納品の際には「これらの本は、人間でいえば一度入院したようなもの。
大事に扱ってください」と言葉を添える。

自ら修理した本を通して、物を大切にすることを子供たちに感じ取ってもらいたい—
—との思いからだ。

自宅には、園児や児童たちからの手紙や手作りのプレゼントが大切に保管されてい
る。

「やぶれていた本が、また読めるようになってうれしいです」「みんなで大切に使っ
ています」「いつもありがとう」

修理を終え、新たに張りつけた背表紙に、マジックで本のタイトルを記す。パソコ
ンでラベルを作成した時期もあったが、ある幼稚園の園長に「手書きのほうが、温か
みがあっていいですね」と言われて以来、自筆で通している。

「いつも教祖がご覧くださっていると思って、天に〃貯金、をするつもりでコツコツ
と続けてきた。『ありがとう』と人さまに喜んでもらえることが、何よりの喜び。図
書修理を嫌だと思ったことは一度もない。私の生きがいです」

手書きの文字が、じんわりと温かく感じられた。（文中、敬称略）